

機関番号：12401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21820005

研究課題名（和文） 指示語の誤用を防ぐための諸言語との対照分析

研究課題名（英文） Contrastive analysis on several languages
to prevent misuse of demonstratives

研究代表者

金井 勇人 (KANAI HAYATO)

埼玉大学・国際交流センター・助教

研究者番号：70516319

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語学習者数の多い母語である3つの言語（インドネシア語・韓国語・中国語）を取り上げ、それらと日本語との指示語の対照分析を行った。その結果、3系列（コア相当）と2系列（コア相当）の指示語体系の異同、および3系列同士・2系列同士の指示語体系の異同などを分析できた。このような4言語にまたがる指示語の対照分析の結果は、学習者による指示語の誤用を防ぐための有用な資料になるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this study, a contrastive analysis was carried out on the use of demonstratives in Japanese and other three languages (Indonesian, Korean, and Chinese) on the basis of the fact that a large number of the native speakers of these three languages are students of the Japanese language. The study thus facilitated an analysis of the difference in the use of demonstratives in the three-step (like [ko/so/a]) and two-step (like [ko/a]) systems, as well as the other differences therein. The result of this contrastive analysis on the use of demonstratives across the abovementioned four languages can be considered as useful material toward preventing learners of Japanese from misusing the Japanese demonstratives.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	290,000	87,000	377,000
2010年度	350,000	105,000	455,000
年度			
年度			
年度			
総計	640,000	192,000	832,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：指示語・誤用分析・対照分析

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語教育では、学習者による指示語の誤用が、上級レベルになっても現れ得る、という現状がある。例えば、「私の友だちは、とてもストレスがたまっています。*あの友だちは、ストレスがたまると運動のためにアパートの階段を上ったり

下りたりしています」

のような文において、「あの*友だち」としてしまふような例である。この場合には「その友だち」としなければならない。

(2) このような指示語の誤用が生まれる背景には、学習者の母語の指示語の体系と、日本

語の指示語の体系とが異なる、という事情が存在するものと考えられる。

(3)世界の諸言語には、日本語の[コ・ソ・ア]に相当するような3系列の指示語を持つシステムが存在する一方で、英語の[this・that]のような2系列の指示語のシステムも存在する。

(4)当然、2系列の指示語を持つ母語話者にとっては、日本語の3系列の指示語を適切にマスターすることは難しいであろう。それとともに、日本語と同じ3系列の指示語でも、日本語の[コ・ソ・ア]と各々が完全に一致するというわけではない。

(5)本研究では、上述のような日本語の指示語と、学習者の母語の指示語との相違点が、指示語の誤用を生み出す大きな原因であると考える。

2. 研究の目的

(1)日本語学習者による指示語の誤用を防ぐためには、まず、日本語教師の側で、世界の諸言語には3系列と2系列の指示語体系が存在すること、そして2系列の指示語体系を母語に持つ学習者にとって、日本語の3系列の指示語体系[コ・ソ・ア]をマスターすることが難しいこと(かつ“どのような”理由によって難しいのか)を熟知しておく必要がある。

(2)また、日本語と同じ3系列であっても、それが[コ・ソ・ア]と完全に一致するわけでは決していない。したがって3系列の指示語体系を母語に持つ学習者の誤用は、体系内の不一致から生まれ出るものと考えられる。

(3)以上の諸点を明らかにするため、本研究では、日本語と2系列の指示語体系、および3系列の指示語体系との異同を分析し、それを明らかにした上で、その結果を日本語教育において指示語の誤用を防ぐための、有用な資料とすることを、目的とする。

3. 研究の方法

(1)上述のように、2系列の指示語と3系列の指示語とを取り上げ、その体系を日本語の指示語体系と対照する。言語の選出に際しては、当然ながら、日本語学習者が多い言語を取り上げる。

(2)日本語学習者が多いのは、国際交流基金の調査(2006)によると、1位:韓国、2位:中国、3位:オーストラリア、4位:インドネシア…、となっている。

(3)このうち、3系列の指示語体系を持つのは韓国語である。そこで、3系列の指示語としては韓国語を選んだ。また2系列の体系を持つのは、中国語・英語・インドネシア語であるが、日英の対照は先行研究の数も多い。またそれと対照的に、日本語-インドネシア語の対照研究は、管見の限りでは数が少ないことから、2系列の指示語としては中国語とインドネシア語を選ぶこととした。

(4)このように4つの言語を一挙に取り扱うことは大変ではあるが、その代わり、2言語の対照研究が、言わば一元的な分析であるとすれば、本研究において4言語を取り上げるということは、言わば多元的な分析を可能にするものと考えられる。

①異系列の対照

(3系列)日本語・韓国語

⇔(2系列)インドネシア語・中国語

②同系列の対照

(3系列):日本語 ⇔ 韓国語

(2系列):インドネシア語 ⇔ 中国語

このような多元的な分析により、体系自体の異同から起きる誤用と、同体系の内部での各指示語の性質の異同から起きる誤用を整理して分析することができるようになる。

(5)分析にあたっては、第一に、研究代表者(金井)が各言語の指示語に関する先行研究や、辞書・コーパスなどを参照し、当該言語の指示語体系についての言わば“青写真”を作成した。それをもとにして、各言語の母語話者と議論をして、不自然な解釈があれば、修正する、という作業を、地道に積み重ねていった。母語話者との議論は、何十通ものEメールを通じて、および何回もの直接のインタビューを通じて行った。また、各母語話者には、それぞれ複数の知人や友人(同母語話者)の意見も聴取してもらうよう依頼した。

4. 研究成果

(1)日本語

日本語は[コ・ソ・ア]という3系列の指示語の体系を持つ。この指示語の使用は、主に「現場指示」と「文脈指示」に大別される。

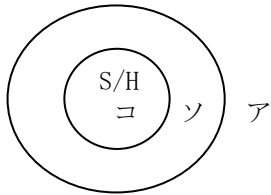
①現場指示

指示の現場に存在する対象を指す用法である。この現場指示は、さらに「距離区分型」と「人称区分型」に分けられる。

距離区分型では、基本的に指示者から近い対象をコで、遠い対象をアで、近くも遠くもない対象をソで指す。この様子は、図1

のように表すことができる。

図1 距離区分型



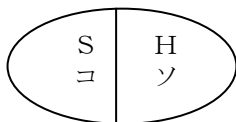
S = 話し手、H = 聞き手

- a) ちょっと、これ、見てよ。
- b) ちょっと、それ、面白そうだね。
- c) ちょっと、あれ、なんて書いてあるの。

それぞれ、話し手から、a)は近い対象を、c)は遠い対象を、b)は近くも遠くもない対象を指している。

一方、人称区分型では、話し手の領域にある対象をコで、聞き手の領域にある対象をソで指すことになる。この様子は、図2のように表すことができる。

図2 人称区分型



S = 話し手、H = 聞き手

- d) A : これ、昨日買ったんだけど、とても面白いよ。
- B : 本当? ちょっと、それ、見せて。

d)においては、Aは自身(話し手)の領域にある対象を「これ」で、BはA(聞き手)の領域にある対象を「それ」で指している。

②文脈指示

前文脈に現れた対象を指す用法である。コ・ソ・アのいずれも用いることができるが、それぞれのニュアンスは異なる。

- e) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。この友だちは、ストレスがたまると、アパートの階段を、上ったり下りたりしています。
- f) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。その友だちは、ストレスがたまると、アパートの階段を、上ったり下りたりしています。

e)のように「この」を用いると、対象が眼前にあるかのような直示的ニュアンスが醸し出される。一方、f)のように「その」の場合

は、直示的ニュアンスはなく、ただ単に前方照応しているだけである。

- g) 私の友だちは、とてもストレスがたまっています。*あの友だちはストレスがたまると、アパートの階段を、上ったり下りたりしています。

また、g)のように「あの」を使用することはできない。アは記憶内の対象を指示するのであって、この場合の聞き手(読み手)の記憶内に「友だち」は存在しないために、g)は不適格な文になってしまうのである。

- h) A : この間、一緒に行ったレストラン、おいしかったね。
- B : そうだね。あのレストラン、また一緒に行こうね。

h)のように、聞き手(A)の記憶内にも対象(レストラン)が存在して初めて、ア系列の指示語を用いることができる。このような、記憶内の対象を指す用法は、「記憶指示」と呼ばれる。

(2)インドネシア語

インドネシア語の指示語の体系は、2系列である。“ini”が近称、“itu”が遠称である。

①現場指示

現場指示では話し手から近い対象を“ini”で、遠い対象を“itu”で指すことになる。基本的に“ini”がコに相当し、“itu”がアに相当する。ソ(中称)に相当する指示語は存在しない。

インドネシア語における指示語の選択は話し手からの距離に専ら拠っている。つまり話し手から近い対象を“ini”で、遠い対象を“itu”で指すということであり、中称は遠称に包含されることになる。

しかし、話し手から近い対象であっても、その対象を聞き手が身に付けているような場合には、近称の“ini”ではなく、遠称の“itu”が用いられる。これは、聞き手が身に付けていることにより、話し手が“心理的な遠さ”を感じるから、と考えられる。

- i) A : Dasi *ini/itu, keren sekali ya.
(*この/そのネクタイ、とても素敵ですね。dasi=ネクタイ)
- B : Terima kasih.
(どうもありがとう。)

②文脈指示

前の文脈に現れた対象は、近称の“ini”では指せず、遠称の“itu”で指す。これは、e)で見たように、日本語で前の文脈に現れた

対象をコで指せるのとは、対照的である。

j) Temanku sangat stress.

Temanku *ini / itu kalau stress naik turun tanpa apartemen untuk olah raga. (私の友だちは、とてもストレスがたまっています。*この / その友だちは、ストレスがたまると、アパートの階段を、上ったり下りたりしています。teman=友だち、ku=私の)

この観察から、インドネシア語では“ini”の直示性よりも、“itu”の前方照応性の方が優先される、ということが分かる。

(3) 韓国語

韓国語の指示語体系は、日本語と同じ3系列である。이 (イ・近称)、그 (グ・中称)、저 (ゾ・遠称) である。

① 現場指示

現場指示では、日本語と同じく、話し手から近い対象を이 (イ・近称) で、遠い対象을 저 (ゾ・遠称) で、近くも遠くもない対象을 그 (グ・中称) で指すことになる。ただし、그 (グ・中称) の指せる領域は、日本語の中称であるソより、ずっと狭い。例えば次の例のように、話し手と聞き手から一定以上の距離をもった対象の場合は、그 (グ・中称) ではなく、저 (ゾ・遠称) で指さねばならない。

k) 저기 빨간 벽돌색 건물 앞에서 세워주세요.

(そこのレンガ色の建物の前で止めてくれ。저기=あそこ、건물=建物)

日本語では「そこ」で指すような距離でも、韓国語では저 (ゾ・遠称) が用いられることになる。では、그 (グ・中称) は用いられるのは、どういう場合か、というと、話し手と聞き手との距離が近く、両者から対象までの距離に対して、ある程度の割合を持っているときに限られる。

l) A : 그 소금을 주시겠어요.

(その塩、取ってくれないかな。
그=その、소금=塩)

B : 예. 드세요.

(はい、どうぞ。)

この(1)の場面のように、話し手と聞き手が同じテーブルに着いているような近い位置関係にある場合、対象(塩)までの距離は、両者にとって大きな意味を持つてくる。このようなときに限って、그 (グ・中称) が使用可能となる。

② 文脈指示

文脈指示も、日本語と同じ3系列であって、各々のニュアンスも、基本的に同様である。ただし、注意したいのは、저 (ゾ・遠称) による「記憶指示」の範囲が、日本語のア系列に比べてずっと狭い、ということである。

m) A : 며칠전에 함께 갔던 레스토랑 맛있었죠.

(この間、一緒に行ったレストラン、おいしかったね。레스토랑=レストラン)

B : 그래요. 우리 나중에 그 레스토랑에 또 가요.

(そうだね。あのレストラン、また一緒に行こうね。)

日本語では、聞き手が知っていると話し手が“想定”した場合、「あの」を用いることができるが、韓国語では「その」に相当する그 (グ・中称) を用いることになる。それでは記憶指示の用法はないのか、というと、そうではない。

金(2006:108)では、「あの輝かしい百済の文化！」のような「百科事典的知識であり、具体的には歴史上有名な人物や文化遺産に関する知識」であるときは저 (ゾ) で指せると述べられている(『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』風間書房)。

このように記憶指示のアの範囲と저 (ゾ) の範囲が著しく異なる(ただし基本的な性質は等しい)ことは、注目すべき点である。

(4) 中国語

中国語の指示語の体系は、インドネシア語と同じく2系列から成る。这 (zhe・近称)、那 (na・遠称) である。

① 現場指示

現場指示では、やはり同じく2系列のインドネシア語と同じく、対象が話し手から近いか遠いかによって指示語が選択される。つまり話し手から近ければ这 (zhe・近称) で指すことになり、遠ければ那 (na・遠称) で指すことになる。

ただし、インドネシア語と異なっているのは、聞き手が身に付けているものであっても話し手から近ければ这 (zhe・近称) で指すということである。

n) A : 这个领带很漂亮.

(そのネクタイ、とても素敵ですね。
领带=ネクタイ)

B : 谢谢.

(どうもありがとう。)

インドネシア語では、その対象が話し手から

近くても、聞き手が身に付けている場合は、話し手が“心理的な遠さ”を感じるために、近称の“ini”でなく、遠称の“itu”が選択されるのであった。中国語では、このような場合も、つまり聞き手が身に付けていようがいまいが、話し手から近ければ、这(zhe・近称)が用いられるのである。

それでは、中国語には“心理的な遠さ”という感覚がないのかというと、そういうわけではない。木村(1992:189)は、次のような、話し手から近い対象を那(ナ・遠称)で指すという例を挙げている。

o) 彦市、你那是什么呀？
(彦市どん、そら何な?)

そして「対象の正体が明らかでないうえに、それが相手の領域に属するものであるという認識が重なり、そこに心理的な疎外感が生じて、遠称による指示が促された」と説明を与えている(「中国語指示詞の「遠近」対立について—「コソア」との対照を兼ねて」『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』くろしお出版)。

このように、インドネシア語と中国語は、同じ2系列でありながらも、聞き手の領域を指す場合の指示語の選択が異なるのである(ただし、基本的な性質は等しい)。中国語の方が、インドネシア語よりも、“心理的な遠さ”を感じるための要件が多いということである。同じ2系列の指示語体系にも、このような相違が存在することは、注目すべき点である。

②文脈指示

中国語の文脈指示では、前方照応において、这(zhe・近称)、那(ナ・遠称)を、ともに用いることが可能である。

p) 我有一个朋友精神压力很大。
(私の友だちはとてもストレスがたまっています。朋友=友だち)
这个 / 那个 朋友一有压力、就爬公寓的楼梯、爬上爬下做运动。
(この / その 友だちは、ストレスがたまると運動のために、アパートの階段を上ったり下りたりしています。)

这(zhe・近称)を用いたときの直示的ニュアンスは、コを用いたときと同様であるし、また、那(ナ・遠称)を用いたときの純粹な前方照応のニュアンスも、ソを用いたときと同様である。

むしろここで注目すべきは、インドネシア語では、“ini”の直示性よりも、“itu”の前方照応性の方が優先される、という原則が存在するわけだが、中国語には、そのような

原則は存在しない、ということである。現場指示の場合と同様、同じ2系列の指示語体系であっても、各々の指示語の性質が異なるということはあるわけである。

(5)まとめ

本研究では、日本語・インドネシア語・韓国語・中国語という4つの言語の指示語を取り上げて、それぞれの異同について分析した。日本語と韓国語は3系列、インドネシア語と中国語は2系列の指示語体系を持つ。冒頭に述べたように、これら4つの言語の指示語の体系を一挙に扱うことにより、多元的な分析が可能となったものと考えられる。

まず、2系列と3系列とは指示語体系そのものを異にするので、基本的に用法が異なるわけである。しかしながら、同系列であれば用法が同じであるかということ、そういうわけでは決してない。これまで見てきたように、同じ3系列の日本語と韓国語の間にも、また同じ2系列のインドネシア語と中国語の間にも、それぞれ相違点は存在する。

日本語教育においては、日本語教師の側がこのような相違点をしっかり押さえておくことが、学習者による指示語の誤用を防ぐにあたっては肝要である、と考えられる。今回の分析結果は、主に[ソ⇔ア]の誤用を防ぐことに貢献し得るものと思われる。その他のタイプの誤用を防ぐための対照分析が、研究代表者(金井)にとって今後の課題ではあるが、今回の研究により、指示語の誤用を防ぐために、4つの言語を同時に取り上げる、という“多元的な対照分析”が有効である、ということを示すことができたものと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 金井 勇人、金善花、ジョセップ・プラウイタ、日本語と諸言語の指示語の対照について—インドネシア語・韓国語・中国語と—、埼玉大学国際交流センター紀要、査読有、5号、2011、pp.17-34、埼玉大学国際交流センター、

<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=KY-AA11414361-05-01>

② 金井 勇人、なぜ聞き手を指す「そのN」は非丁寧になるのか、日本語／日本語教育研究、査読有、1号、2010、pp.139-156、日本語／日本語教育研究会(ココ出版)

[学会発表] (計0件)

〔図書〕（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

<http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/xoonips/detail.php?id=KY-AA11414361-05-01>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金井 勇人 (KANAI HAYATO)

埼玉大学・国際交流センター・助教

研究者番号：70516319

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：